

フィラリアの薬は予防薬ではなく、駆虫薬。飲ませ終わるのが早すぎると、感染の危険性があります。

蚊は気温15°C以上で吸血を開始するといわれ、フィラリアの予防期間は、蚊の活動開始1カ月後から、活動終了1カ月後まで。地域によりますが、だいたい4、5月頃から11、12月頃までです。なぜ蚊がいなくなつてからも飲ませるかというと、この薬が予防薬ではなく、駆虫薬だからです。

つまり、薬を飲めば1カ月間、感染を予防できるのではなく、感染したフィラリアを月1回まとめて殺す薬なのです。ですから、蚊のシーズン終了時期に感染したフィラリアを逃してしまうことがないよう、1カ月待って最後の駆虫を行うわけです。蚊がないとつい忘れがちですが、最終月までしっかり飲まないと、感染の可能性が残ってしまいます。

最近のフィラリアの薬には、腸内寄生虫も同時に駆除できるタイプのものがあるので、おなかの虫の駆虫も兼ねて、通年で薬を飲ませている飼い主さんもいます。

最終月、フィラリアの薬を飲ませ忘れました。
蚊はもういないし、大丈夫ですよね？



ごめんなさい。
忘れました。

ミニヤ フィラリア対策はいつまで必要ですか？

夏にノミに感染して以来、
月1回駆除薬を使っていますが、
いつまで必要ですか？

確実を期すなら、
通年予防をおすすめします。

お部屋の中は
あったかいなあ～



お答えいただいた先生
みゅう動物病院
本田 善久 先生

フィラリアやノミ・ダニ予防などで来院機会の多い春夏は、その際、健康チェックもできるのですが、秋冬は動物病院への足が遠のきがちな季節です。病気の見落としがないよう、あえてこの時期に定期的な健康診断を受けられると効果的ですよ。



この頃、
あまり水を飲まないので、
泌尿器の病気が心配です。



ごはんもお水も
よろしくね！

尿石症の原因は、飲水量より
食事内容。予防のためには、
良質なフードを与えましょう。



暑いとき、犬は体温を下げるために、舌をハアハアさせて唾液を蒸発させるので、頻繁な水分補給を行います。しかし、冬はその必要がないので、飲水量は自然と減少するのです。

猫の場合は、冬に尿石症が増える傾向がありますが、犬にはそれほど季節性は見られません。尿石症の原因是、飲水量の減少より、むしろ食事内容が関わっていることが多いです。ミネラル量が適切に調整された品質の良いフードを与え、犬が飲みたいときに自由に飲めるように水が用意されていれば、それほど心配することはありません。

人は、寒くなると
インフルエンザが流行しますが、
犬も注意が必要ですか？



冬だけ注意じゃないんだよ～

犬には、人のような風邪や
季節性インフルエンザはありませんが、
似た症状の感染症があります。

冬に風邪やインフルエンザが流行るのは、空気の乾燥により、鼻やのどの粘膜のバリア機能が低下し、細菌やウイルスに感染しやすくなることと、寒さで体温が下がることにより、体の免疫力も低下してしまうからです。

犬には人の風邪に似た呼吸器系症状を示す、ジステンパーーやケンネルコフというウイルス性感染症があり、とくに子犬は感染しやすい病気です。いずれもワクチンで予防できますので、冬だからというのではなく、定期的にワクチン接種をしましょう。

➡ ジステンパー、ケンネルコフについて、詳しくは「症状から見つける犬の病気」(P.168)をご覧ください。

先生教えて！

獣医師さんの健康講座

秋冬に多い お悩みを解決！

秋から冬にかけて、愛犬の健康管理で注意すべき

病気や日常のケアとは？

飼い主さんの気になる質問や心配事に、

ペピイカタログの監修をしていただいている

みゅう動物病院 院長の本田善久先生がお答えします。



冬にかかりやすい病気対策を教えて！

先生教えて!
獣医師さんの健康講座
**秋冬に多い
お悩みを解決!**

秋冬編

寒い時期の運動や食事のポイントは?



こたつに入ってばかりで
乾燥するせいか、フケが増えました。

皮膚病の可能性がなければ、
保湿のスキンケアをしてあげましょう。

発疹や脱毛など、フケ以外に皮膚の異常は見られませんか? 皮膚病の可能性がなければ、こたつによる乾燥が原因かもしれませんね。その場合には、ブラッシングや保湿機能のあるシャンプーやトリートメントでスキンケアをしてあげましょう。また、高齢犬や病気の犬が長時間こたつに入ったままのときは、時々様子を見てあげてください。

カイロやヒーターは低温やけどに
注意して。ストーブやコードには
事故防止のためのガードを。

ペットヒーターや使い捨てカイロなどに、長時間、直接体を密着させていると、低温やけどをすることがあります。熱くても逃げ場がない狭いハウスの中、動きが鈍くなっている高齢犬や病気の犬などはとくに注意が必要です。カイロやヒーターは、タオルでくるむなどの配慮を。

ストーブに近づきすぎて、被毛を焦がしてしまうケースも時々見られます。ストーブを倒せば火事にもなりかねませんから、暖房器具の周りは柵などでガードしましょう。

またコードはかじって感電すると、肺水腫や口の中のやけど、ショック状態を起こすこともあります。いたずら盛りの子犬がいるお宅なら、コードカバーで覆うなどの対策をしてください。

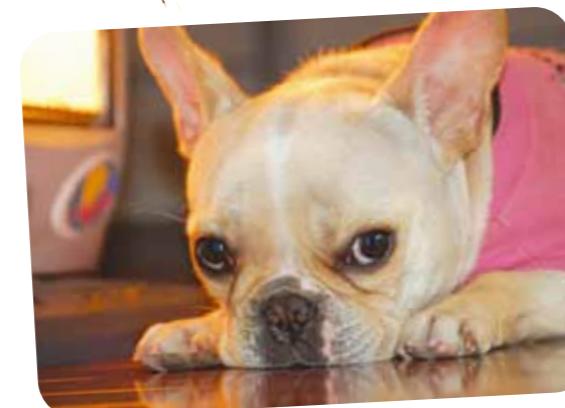
冬は寒うなので、
排泄は室内でさせたほうが
いいでしょうか?



トイレはおうちで
するんだよ!

乾燥
しちや
いました。

ストーブやヒーターから
離れないのですが、
やけどをしませんか?



近づきすぎには
注意だワン!

排泄物の観察は、病気発見の力
子犬のときからトイレでする習慣を。

季節に関係なく、マナーの面からも健康管理の面からも、室内で排泄させる習慣をつけるべきだと思います。排便・排尿のしかた、色、におい、量など、排泄物の観察は、病気発見のうえで非常に重要です。とくにおしつこは、土の上でしたら色も量もわかりません。成犬になってからのトイレ・トレーニングは時間がかかるので大変ですので、できるだけ子犬のときから習慣づけましょう。

寒さ対策や暖房器具の注意点は?



犬の飼育書に
「冬は給餌量を増やすように」と
ありましたか? 太りませんか?



こんなに食べたら
太っちゃうかな~

給餌量は飼育環境に合わせて調整。
室内犬なら増やさなくてもいいでしょう。

昔は、屋外飼育が一般的で、夏と同じ給餌量だとやせてくることが多かったです。寒い時期は、体温維持のために余計にエネルギーが必要だからです。

しかし、現在は、暖かい室内で飼われることが多く、体温維持にエネルギーが使われることはありませんので、あえて給餌量を増やす必要はないでしょう。かえって太らせる原因になるかもしれません。

給餌量は、飼育環境に合わせて調整してください。外で飼育している場合には、冬は、犬舎をあまり風の通らない場所に移動したり、入り口に毛布などをかけて風を防ぐなど、給餌量以外の配慮も忘れないようにしましょう。

寒がって散歩を嫌がるのですが、
犬は寒さに強いはずでは?



最近の犬は寒がりです。
散歩はできるだけ暖かい時間帯に。

犬は寒さに強いといわれますが、室内飼育が増えて、最近の犬はついぶん寒がりになっています。冬の冷え切ったアスファルトの上を歩くのは、犬にとってもつらいと思います。散歩はできるだけ暖かい時間帯に出かけるようにしましょう。また、室内と外気との極端な温度差は体に大きな負担となります。高齢犬や心臓疾患の持病をもつ犬などは、寒い日は無理して散歩に行かなくてもかまいません。

寒いの
苦手なんだもん。

